

# 僧侶の靈異

堀 藤吉郎

枯れ木に花を咲かせた千手観音

濱脇の山の手にて四国第七番の札所、宝篋山宝満寺と書いてある偏額の掛かった小院がある。

天台宗の末寺でこの寺の本尊は、白檀の千手観音立像で、推古天皇の十二年聖徳太子が夢殿に籠もって祈願をこめられて一刀三礼して彫られたと曰く付きの仏像である。

大和の斑鳩の宮に安置してあったもので、皇極天皇の二年蘇我氏と物部氏との崇佛廃佛の争いの時に丹波五郎という信者が捨てられるのを恐れて持ち出し別府の田野口村の山中に隠したものであると言われているが、元正天皇の養老二年に有名な仁聞菩薩が奇瑞を感じて一字を建立して宝篋山宝満寺と名付けて、この仏像を本尊としたといわれている。



神龜四年には朝廷より水田、山林を賜り勅願所の一つとなり、法燈不滅の聖地といわれたが、後世荒廃したので享保年間浄蔵法師が今の観音堂を建てた。法隆寺の夢殿に似せたものと云われ、豊前の彦山権現を第一番の札所として西国三十三ヶ所七番の霊場となっている。大正年間現在の地に遷したもので、昔の寺跡から古瓦や経筒などが発掘されたこともあった。

本尊は靈験あらたかなもので、いろいろと奇瑞を現している。千手経を誦すると枯れ木に花を咲かせたり、千手陀羅尼の功験で大蛇の難を逃れたとか、忙しい時に観音が千本の手を損料を取って貸したとか、千手経を粗末に

したた僧が虚空に吊上げられ翌日地上に落とされて砕死んだとかおもしろい伝説がある。

むかし、仁聞菩薩が眺めている境内の梅の古木は、どうしたのか春が来たというのに向に蕾が付かない。

菩薩が、「昔から千手経を誦すれば有難い靈異が現われている。聖徳太子の心こもる千手観音の功力によって、きつと花咲くぞ、観音のご利益現し給え」と経を誦ずると、不思議やばつぼつと蕾が芽生え美しい花が咲いたということである。これは千手観音の枯木開花の利益である。

宝満寺は、こうした靈感の話が伝わってて観音巡礼の信者で賑わったということである。

### 佛力の加護で根が生えた挿木の松

濱脇中学校下の丘阜の見晴らしのよい所に、海宝山崇福寺という禅宗の古刹がある。この寺は龜山天皇の文永三年に朝見八幡宮の神官神尾張守政尚の末子である大和守政長が建立したもので、文和三年に、濱脇赤野城主雄城若狭守源頼重が再建して正受大和尚を住持として迎え

た。その後、寛永年中さしも豪壮を誇った堂宇も荒廃したが、竺雲和尚を中興開山として立て直した。以前は山家の伽藍田という所にあったが、安永年間崇福寺の八世梅室大和尚が現地に移築したもので、本尊は一尺八寸の釈迦無尼佛の座像である。

この寺の石段を登ると左側に青々と茂る直幹の松が植わっている。目通り直径八寸位で見ると元気に満ちた松である。崇福寺十六世として迎えられた漸応和尚は高徳の誉れの高い僧であった。布教にかけては西日本第一人者といわれ、和尚の説教を聞けば随喜の涙をこぼすほどであった。朝夕佛に仕え余裕があれば托鉢をやった。また、絵をよくし絵師棟処画伯に師事して彩管をふるっていたという。

ある日、漸応和尚は本堂の花筒に供えた花を取り替えようとしたとき、その中に一本の松の小枝があった。和尚は、「むかし弘法大師は錫杖で地面をついて水を涌かして、水に不自由な人々を助けたといわれ、親鸞上人は挿した箸に根が生えたという。わしもこの松を挿してみ

よう、大慈悲には枯れた木にも花が咲く、信心をすれば凡夫であれ佛のお救いに洩れることはない、きつと根が生えるぞ」と、大般若経を誦読しながら山門の脇の地を選んで突き挿した。ところが、半ば枯れていたこの松が月日のたつにつれて根をはり、明くる年には新しい芽を吹いてた。和尚は、これは日頃信じる本尊の加護であると喜んだといわれる。

今は山門はないが、石段を登りつめた所の左に隆々と生い茂っている松が、漸応和尚が挿した献花の松であるといわれる。

### 良念の怨靈で滑る油坂

朝見八幡宮から、石ころの坂道を登り吉備山の北麓の枝郷道、昔の庄内道と称したこの山道は俗に七曲がり坂と云った。今は新道ができて通る人もなく荒れ果てている。別府耶馬と云われた六枚屏風岩の奇勝を抜けると、櫛下富士と呼ぶ小高い山がある。この山の麓にいつの頃から七精寺という庵寺があった。通りかかりの旅人や付近の農家からの喜捨を受けて細々と法燈を継いでいた。

佛門に帰依し朝夕の勤めに励み衆生済度を本願とする住持は、墨染めの法衣こそ着けていたけれど極悪非道の人間であった。

ある雪まじりの風の吹く夕方、師の坊は雲水良念に今夜の灯明の油がないので、急いで朝見の町に買って買ってくるように、言葉荒らあらしく油壺といくばくの銭を投げ与えた。師の坊に何といわれても両親を失った孤独の良念は、この寒い雪空にとは思っても雲水の身、凍る手に油壺を提げ素足に草履といった姿で七曲り坂を下って朝見の油屋までたどりついた。

「良念様この寒いのご苦労です。何と和尚があんな人だし、お前様が可哀相でならぬわい。さあさあこっちに来て火にお当たり、餅も焼いて進ぜるほどに」といわられると良念は暖をとりながら口の中で「佛恩」と称えては、主人に対して感謝の心を捧げ油壺を大切に下げ、夕闇せまる坂道を登り七曲りにかかった。「南無阿弥陀佛、南無阿弥陀佛」と一曲がり二曲がり登るうち、どうしたはずみか草履の緒が切れ、あつという間もなく転倒してしまった。大切な油壺は木端微塵、油は

坂の石畳の積雪を黄色に染めて緩やかに流れていった。

「このまま帰れば師の坊はこのわしを責苛むことであろう。どうしてわしはこんな不運に生まれたのだらう。」

しかし、引き返してまた朝見に行くにも油壺も銭もない。和尚に話して許してもらい、寒くとも、今夜のうちにまた買いにいこうと思いなおした。七精寺にかえって話すと和尚は烈火のごとく怒って、良念を打ちすえてしまった。堪えかねた良念は、「油壺を壊した位でこんなにせずとも」と一目散に寺を飛びだし、行方知れずになった。

数日後、七曲がりの谷底の松の枝に首をくくって死んでいる雲水を旅人が見付けた。これは十五年の年を一期として変わり果てた良念の姿であった。

それから後、この七曲りの坂では、かならず転んで油壺を壊すと言ひ伝えられ、七精寺の油坂と呼ばれるようになった。やがて、七精寺の和尚には喜捨する者がなくなり、寺も無住のために荒廃してしまった。

天罰を受けて地獄に落ちた円内坊

貞観九年に噴火した鶴見岳の神を祀る火男火売神社は、朝廷から十五町の社田を賜った。この社田のちに比叡山の莊園になり、僧侶が派遣されて経営されていた。

このなかに貪欲で非道な僧侶がいた。社田から上がる年貢米は一升二合舁ではかって一升とし、里人に米を貸し付ける時は八合舁ではかり、取り立ては一升舁を使って高利を取るの、百姓たちは、「なにさま円内坊の奴のすることは非道である。よい田があれば借りることはないのだが、食うためには仕方がない。」と泣き寝入りをしていた。

しかし、天は彼に二物をあたえず佛罰を蒙るときが来た。円内坊の庫裏の床下に大地獄が噴き出して、庫裏諸共ともに呑み込まれて跡形もなくなった。

このことが起こって里人はこの地獄を円内坊地獄と呼ぶようになった。大地獄には泥地獄が沢山あり、この地獄に向かって「坊主、坊主」と呼ぶと「ぶくぶく」と円内坊が怒って大坊主、小坊主の泥を吹き上げるようになった。この状態を円内坊が地獄に墜ちた断末魔の苦しみの姿を見せているのだと云われている。